小林学院

Ryoma Hayami

1

小林学院

2036年、春。僕は受験戦争を終えて、無事小林学院に入学した。校章を受け取り入学式を終えると新入生はガイダンスがある。僕と中学から一緒で親友の____が、

「ガイダンス面倒くさいからサボろうぜ」

と僕に言ってきた。ぶっちゃけ僕も面倒くさいと思っていたしガイダンスは体育座りで点呼なども特にないようだったので____と一緒にサボることにした。屋上で時間をつぶしてガイダンスが終わりそうな頃合を見計らって教室に戻った。中学のころからこういう面倒くさい行事をばれないようにサボってきた僕らはこの道においてプロといっても過言ではない。ホームルームを終え帰宅しようとしたとき、校章から“今すぐ教員室に来い”と聞こえてきた。不気味に思いながらも教員室にいくと中でいかついハゲ頭の先生が待っていた。

「おお、君か。俺は学年主任の刷毛　八郎だ、よろしく。まあそんなことはどうでもいい。お前、今日のガイダンスサボっただろ。」

“はけ はちろう” って名前なのか。こいつにぴったりの名前だな。以後僕はこいつのことをハゲパチと呼ぶことにしよう。いや、そんなことよりなんでばれたんだ。完璧にやったはずなのに。

「俺の完璧なサボりがばれたという顔をしているな。確かに完璧だった。だがな、残念なことにお前が校章を身につけている限り確実にばれる。残念だったな。」

ＧＰＳ機能でも入っているのだろうか。もし入っているならサボることは今後一切不可能だな。ああ、マジかよ、、、。

　昇降口で____が僕を待っていた。

「お前、遅かったな。もしかしてサボってんのばれた？」

「ああ。校章にＧＰＳ機能がついてるなんて思わなかったぜ。」

「ああ、やっぱそうなんだ。よかったー、校章体育館に置いといて。」

「お前、何で教えてくれなかったんだよ。」

「いや、この学校ハイテクだしあり得るかなって思ってさ。校章あるなしで比較する必要もあったしさ、すまん。」

あ、そうか。そういえばこの学校はハイテクが売りなんだ。“大家族、便利な学校”小林学院が掲げるスローガンである。この学校は